

海外フィールドワーク支援プログラム・

国際リトリート・台湾・報告書

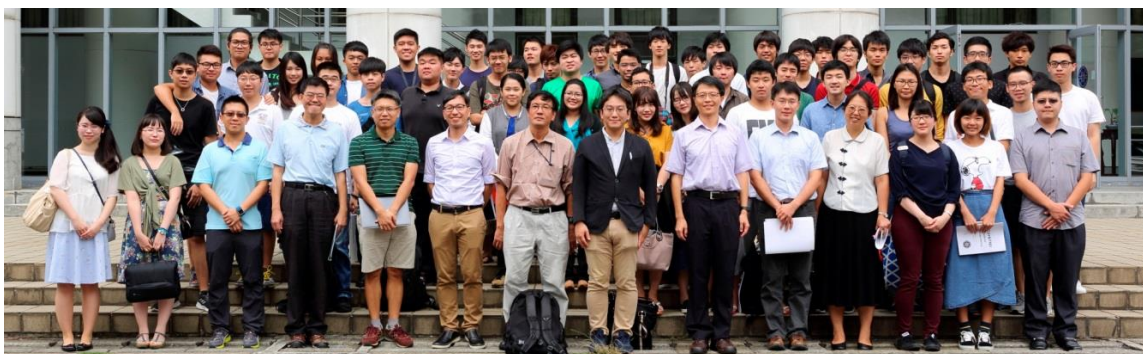
生命ナノシステム科学研究科 物質システム科学専攻
野々瀬真司

海外フィールドワーク・国際リトリートとして、生命ナノシステム研究科・物質システム専攻および国際総合科学部・物質科学コースの学生 27 名を、村田秀信先生、野々瀬真司の教員二人で引率し、2017 年 9 月 6 日～10 日の期間に台湾へ海外渡航した。この事業は今回で 4 回目となる。昨年度・一昨年と同様に台北にある台湾国立師範大学および、原子與分子科學研究所（台湾国立大学内）を訪問した。一昨年度の本事業において、本学と台湾師範大学との間に MOU を締結した。台湾国立師範大学、原子與分子科學研究所の 2 箇所において、早朝から夕刻までの時間をかけて研究交流会を開催し、本学の学生と相手方の大学の学生の合計 20 数名が口頭およびポスター発表を行った。いずれかの研究交流会にて、本学の学生のほぼ全員が英語による口頭あるいはポスター発表を行った。また、原子與分子科學研究所においては、数カ所の研究室を見学し最先端の高度な実験装置について理解を深めた。本学の学生は、研究交流会での質疑応答および当日夕刻に開催された親睦会、あるいは夜市散策、フィールドワークにおいて、台湾国立師範大学、原子與分子科學研究所の学生と交流し、大いに親睦を深めた。英語は母国語が異なる民族間において意思疎通に用いる最も一般的な手段である。台湾の学生にとっても英語は母国語ではない。本学と台湾の学生が、かたことの英語によってコミュニケーションすることに実践的な意義があったと考えている。台湾が最大の親日国であることもあり、台湾国立師範大学、原子與分子科學研究所の教員の方々はもちろん学生の方々も、研究交流会の開催に関して非常に熱心であり、訪問者である我々に対して非常に親切であった。彼らの誠実で温かい心遣いに対して、我々は心から感謝している。お世話になった台湾の大学の方々に僅かばかりでも恩返しができたら・・・との思いを強めた。そこで、物質システム科学専攻の教員の方々と相談し、科学技術振興機構のさくらサイエンスプランに応募した。幸いにして申請が採択された。現在のところ、台湾国立師範大学の劉祥麟教授と大学院生・ポスドク等の若手研究者 10 人程度を、2018 年 3 月初旬に一週間ほど本学に招聘し、本学の大学院生・教員との学術交流を予定している。

学生を引率して海外渡航するにあたって、特に意識して努めた点を下記に記す。台湾では、大学関係者だけでなく一般市民の方々も、旅行者である我々に対して優しく親切であった。また、台北市は治安の比較的良好な地域であった。しかしながら、学生は社会より我々大学教員がお預かりしている大切な存在である。海外旅行の経験の全くない学生、そもそも旅行に全く慣れていない学生

も数多くいたので気を引き締めた。27人の学生が予期せぬ想定外の事故・トラブルに遭遇しないように、二人の引率教員は旅行中に絶えず細心の注意を配り、緊張感を維持する必要があった。一日に何度も、移動の度に点呼を行い、学生全員の集合を確認した。必ず集合時間を守るように周知した。渡航中にパスポート、クレジットカード、携帯電話などの貴重品を紛失しないように何度も学生に注意を喚起した。移動のため学生を乗せたタクシーの運転手の全員には、中国語で目的地を詳細に記述したメモを必ず手渡すようにした。(中国語のメモはホテルのフロントにて書いてもらい、適宜書き写した。)参加学生全員に宿泊しているホテルの名刺を配布して、万一学生がひとりで迷子になった際に備えた。台湾では自動車の運転は日本よりも若干乱暴で粗雑である。路上で学生が交通事故に遭わないように注意した。また、大勢の人々が行き交う歩道を歩く際には、だらだら長く伸びた学生の隊列の先頭と末尾のそれぞれに引率教員が付き添い、迷子の学生が出ないように気を配った。

この事業で得られた最も大きな成果は、本学の学生が英語によって自分の日頃研究している内容を発表することによって、英語で研究内容を明解に説明する能力の修得だけでなく、自分自身を率直に表現できるような人格の形成である。今回及び過去3回の本事業を契機にして、何事にも受け身で内気であった性格が、より快活で積極的なものに変貌した学生が少なくないと感じている。この事業の目的のひとつは、国際化に対応する人材育成である。今回の海外渡航では、この目的を十分に果たしたと思われる。



台湾国立師範大学での研究交流会の全体写真



原子與分子科學研究所（台湾国立大学内）での研究交流会の全体写真